



「自ら命を絶つこと」

福岡市副市長
荒瀬 泰子



つい最近、知人のご子息が亡くなられたという訃報を聞き、気持ちが沈んでいる。「自殺」だったと聞かされたから。ご子息は将来を嘱望され素晴らしい未来へのレールが敷かれている方で羨ましいとさえ思っていた。そういう中で彼はどんな苦悩を抱えていたのだろうか、苦しい時誰か寄り添ってあげる人はいたのだろうか、思い留めさせることはできなかったのだろうか…、いろいろな思いが頭の中を巡る。同じ世代の子を持つ親としてもやるせない。知人には仕事上何度もお会いしているが、今はご子息のことは語られない。奥様とは全く顔を合わせなくなった。「自ら命を絶つ」という行為は、残された方々にも永遠に癒されることのない大きな傷を残してしまう。

我が国の自殺対策を見てみると、平成10年から自殺者が急増し、3万人を超えた。その後も減少せず、平成18年には自殺対策基本法が制定され、今後10年間に自殺死亡率を20%減少させる数値目標が自治体に求められた。福岡市は今年7月に人口155万人を突破、政令指定都市で5番目の大都市に成長した。人口増加率、一番。若者率、一番。そのような比較的若い福岡市において10年前、年間320人以上の自殺者が報告されている。年齢別では20代66%、30代53%、40代33%、50代12%と圧倒的に若中年層が多い。自殺の原因・動機の一つは健康問題。そのため若い世代のうつ病対策を

急務とした。若い層に関わりある方やかかりつけ医等をゲートキーパーとし早期に治療につなげていく、学校現場も早期に心の健康づくりに取り組んでいく、相談しやすい環境をつくるなど。多くの関係者による協議会もできた。そして平成25年10月には自殺予防相談ダイヤル「一人で悩まないで」が福岡市精神保健福祉センター内に開設（平日10時から16時）。今では月約100件の相談が入り、それなりに周知された。

しかし、自殺行為は男女とも午前1時から6時が圧倒的に多い。当事者が最も苦しんでいる時間帯を支えている「いのちの電話」に改めてその存在感とありがたさを感じた。追い詰められ誰かに最も話したい時、誰かに引き留めてもらいたい時、「いのちの電話」はどれほど多くの人たちに寄り添って来られたか計り知れない。結果はわからずとも、きっと多くの方々が「いのちの電話」で話をしたことで、次の一日を生きてもよと思ったのではないかと信じている。「いのちの電話」に関わっておられる、または関わってこられた方々に心から感謝の意を表したい。そして、これからも大事な命を守るため力をお貸しください。

最後に10年間で自殺者を20%減らすという目標、関係者のお力で達成できそうだとということをご報告させていただきます。